

さゆみ

私の周りを取り巻く全てのものは静寂に包まれている。今私は、かつての私の家の残骸の前に立っている。私の髪は炎で焼け焦げ、グレーで膝丈のスカートは数えきれないほど数カ所に渡ってひどく裂けている。体の部分全ては骨の随まで痛んでいる。ああ、叫びたい。でも私の努力は実らない。枯れきった苦しい息以外に、私の唇を通して伝わる音は何もない。私のシャツの背中も深く裂けている。流れる血を、私は肌を感じていた。脚も痺れている。動けない。私に今出来る事、それはただ、遠くを見つめることだけ。かつての素晴らしかった故郷を見上げるだけ。

その遠くに、今巨大な家々が崩れ落ちいていくのが見える。音も立てずに、どっしりとした建物は自らの重みで沈んでいく。埃と瓦礫が視野を暗くする。

一体何が起きているのか、もう分からない。唯一分かること、それは、私が全てを失ってしまったということ。家族、友達、そして先生。たったの一度で全てが終わってしまうこと、それがどれだけ突然の出来事に感じられることか。時間はこんなにも早く過ぎ去ってしまった。私にはもう、つい最近終わったはずの幼少期やこれから来るはずだった青春時代を振り返ることのできる時間はほとんど残されてはいない。

私の周りには何の香りも存在しない。そして何も感じない。私には、肺から口を通して必死に出口を探している、しわがれた私の呼吸だけしか聞こえない。

でも今、私は何かを感じる。何か違うもの。私はもう一人じゃない？何かが聞こえる気がする。足音だ。引きずっているような、つまずきながら歩いているような足音が。まるでデジャヴューだ。この足音が、私には自分のもののように思える。私は更に遠くに視線をやる。川を挟んで北と南の町を繋げている大きな吊り橋のワイヤーロープが沈んでいくのが見える。ワイヤーロープは裂けていく。そして音も立てずに塵の舞う、赤色に染まった宙に渦巻いていく。かつての町の誇りはまるでトランプで組み立てた家のように崩れ去る。数十年間の生存と崩壊は一瞬にして無という名の統一に化する。

私は今、確かに感じる。もう一人じゃない。私の呼吸は早くなる。私は視線を左に、私自身の目の中にやる。深く傷ついている、とてつもない悲痛、そして絶望。

とある言葉は炎のように私の記憶に焼きついているんだ。

... Armacom...